

シンポジウム報告①

第8回世界畜産学会大会に参加して

安江 健

茨城大学農学部, 稲敷郡阿見町中央 3-21-1 300-0393

1998年6月28日～7月4日にかけて、韓国ソウル大学において開催された第8回世界畜産学会大会(8th World Conference on Animal Production)に参加した。茨城県在住の筆者が北海道畜産学会報に海外報告を書くのは少し奇異な気もするが、編集委員からの依頼により、本大会の報告をさせて頂くことにする。実は本大会において、筆者が事務局の1人になっている「家畜行動に関する小集会」なる集団がラウンドテーブルを開催することになっており、筆者は学会事務局との交渉係を受け持っていた。韓国の学会事務局はかなり混乱しており、連絡の不行き届きや予定変更の連絡の悪さなどのため、筆者は大会開催中、学会事務局との交渉に多くの時間を費やさざるを得なかった。それ故、残念ながら筆者には本大会の各シンポジウムや発表の内容を詳しく報告することはできない。そこで本報では、本大会の報告については各シンポジウムのテーマを簡単に紹介するのみに留め、筆者が主に関係した行動関係の発表を中心とした報告になることを予めお許し願いたい。

“Animal Production into the 21st Century for the Quality of Human Life”を主テーマとした本大会では、特別シンポジウムが1テーマ、シンポジウムが11テーマ、本会議が4テーマ開催された。これ以外にも一般発表が988題発表され、大会前シンポジウムとして3テーマが開催された。開催期間を通して最終的な参加者は91カ国から2,159人であり、日本からの参加者は200名と、開催国以外ではダントツのトップであった。以下に各シンポジウムのテーマを示す。

大会前シンポジウム

1. Recent Advances in the Production of High Quality Pork.
2. Management of Feed Resources and Animal Waste for Sustainable Animal Production in Asia-Pacific Region Beyond 2,000.
3. Rumen Microorganisms and Their Application to the Improvement of Rumen Function.

特別シンポジウム

1. Livestock, Ethics and Quality of Life in the 21st Century.



台湾の行動研究者、Hsia 博士とポスター発表中の筆者(右)

シンポジウム

1. New Technologies for the Production of “New Generation” Feeds and Additives.
2. Sustainable Beef Production in the 21st Century.
3. Sustainable Milk Production in the 21st Century.
4. Recent Advances in Swine Production Systems.
5. New Technologies for Efficient Poultry Production.
6. Food Safety in Veterinary Science.
7. Recent Advances in Animal Genome and Genetic Resources for Efficient Animal Production.
8. Role of Water Buffaloes in Producing Foods.
9. Increasing Role of Secondary Animal Species in the 21st Century.

10. Efficient Animal Production Systems in Harsh Environments.
11. Role of Small Ruminant in the Supply of Animal Products.

本会議

1. Animals, Animal Products and Their Contribution to Quality of Human Life.
2. Application of Biotechnology in Animal Production.
3. Environment, Biodiversity and Human Health.
4. Economics, Systems and Animal Welfare.

筆者は特別シンポジウム、シンポジウムの2, 3, 11, および本会議の3を聞くことができた。シンポジウムの各テーマはそれぞれ複数の発表者により発表されたが、各発表間での重複部分がかかり目(耳?)に付いた。せっかく興味深いテーマを設定しているのだから、せめて特別シンポジウム位は事前に発表原稿を提出させ、発表の重複部分を調整するなどの準備が欲しかったように思う。

これらのシンポジウムに参加していた以外は基本的に一般発表の会場を回っていた。筆者の専門である行動関係の発表は極めて少なく、しかもそのほとんどが我々「行動小集会」のメンバーであったため、聞く方としては今一つ物足りなかったが、幸い筆者のポスター発表には結構外国の研究者も聞きに来てくれた。筆者は「国有林野における無牧柵放牧牛の生息地利用」と題した発表を行ったが、イタリアの放牧研究者から、「山林に家畜を放牧して山火事は発生しないのか?」との質問を受けた。余りにも予想しない質問であったためと筆者のヒアリングの悪さから、何度かこちらから聞き返すと、どうやら半乾燥地域であるイタリアでは、山林に家畜を放牧することで地表の植生が減少すると地表が極度に乾燥して野火が頻繁に発生するそうである。モンスーン地域に位置するわが国では、地表の植生が減少すると土壌流亡をまず第一に心配するが、山火事が発生することはほとんど皆無である。過去の何世紀にも渡り家畜の放牧によって森林を減少させてきた国であるが故の発想に感心するとともに、改めて林野放牧はモンスーン地域であるわが国でこそ持続的たり得ることを実感した。他にもアジア諸国や北欧の研究者などからも有益な質問および意見をもらうことができ、発表者としては非常に有益な学会であった。

一般発表の部では各フロアの1/5程度の発表が常にキャンセルされていた。キャンセルが多いのは本学会に限ったことではないので仕方ないのかも知れないが、いくらキャンセルが出たからといって、発表を勝手に繰り上げてしまうのは問題であろう。参加者は広いキャンパス内に点在する各会場を、プログラムのみ

を手がかりに移動して回るので、キャンセルが出たからといって各会場ごとに勝手に繰り上げ発表を行われたのでは、その会場に行っても目的の発表が聞けなくなってしまう(筆者は一般発表初日にこの目に合い、以後は聞きたい発表の2~3題前にはその会場に入るようにした)。またポスター発表では、ポスター提示用のボードの規格が最終案内のものとは大きく異なっていた(縦と横のサイズが逆になっていた)。幸い筆者のポスターは各部分ごとに別々に作成していたため何とかボード内に納めることができたが、1枚の用紙で作成していた多くの発表者は所定のボードに提示することができず、会場の壁などに貼り出していた。キャンセルの多さや連絡の不備などは、これ程大規模な学会となると事務局のみでどうなるものではないのかも知れないが、各フロアの座長に繰り上げ発表をさせないことや、ポスターの規格を正しく発表者に連絡する位は事務局の努力でいくらかでも解決できた問題であるように思う。これらの面で、本大会は運営面での不備が如実に現れた大会であった。

本大会中の7月1日に、発表会場内の教室を借り切って「家畜行動に関するラウンドテーブル」を開催した。筆者らの「家畜行動に関する小集会」と、国際応用動物行動学会(ISAE)東洋支部の共同開催で行った本ラウンドテーブルは、「アジアにおける家畜行動研究と家畜飼養」というテーマで4名の発表者によって行われた。各発表は次の通りであった。

1. Development of Applied Ethology — Farm Production Ethology vs Welfare Ethology of Symbiosis Ethology —. S. Sato (Tohoku University, JAPAN)
2. Introduction of Korean Animal Husbandry. S. Sato (Tohoku University, JAPAN)
3. Feeding Behaviour of Pigs. L. C. Hsia (Pingtung University, TAIWAN)
4. Future Research Needs in Regard to Farm Animal Behaviour for Sustainable Agriculture in Japan. Y. Nakanishi (Kagoshima University, JAPAN)

当初予定していた地元韓国の行動研究者やモンゴルの行動研究者の発表がキャンセルとなってしまう、結局ほとんどが日本人による発表になってしまったのは、事務局担当であった筆者にとっては非常に残念であった。開催直前まで、会場には我々「行動小集会」のメンバーしか集まっておらず、「外国人が全く参加しなかったらどうしよう」とはらはらしたが、最終的には日本以外にも10カ国から約40名の参加者が得られ、開催当事者としては何とか責任を果たせたように思う。発表自体や会場との質疑応答は非常に参考になった。またこのラウンドテーブルを通して海外の研究者と懇意になれたことも非常に有益であったが、わ

が国を含めアジア諸国では、家畜行動の研究自体がまだまだ根付いていないという印象を強くした。アジアにおける行動研究者間の繋がりを強化するためにも、本大会のような大規模な国際学会で今回のようなラウンドテーブルを今後も続けていく必要性を強く感じた。

以上が本大会の報告であるが、これら以外にも大会中日ツアーにおいて著名な行動研究者である Sambraus 博士と韓牛視察に行き、共に韓牛焼き肉を食べたこと、また、筆者が院生時代に日本に留学していた韓国の研究者らに「犬肉」を食べに連れていってもらっ

たことなど、韓国を充分楽しませて頂いた。本報告を読み返すと、学会事務局の運営面に対する批判めいたことばかり書いてしまったが、何とか大会が無事に終了した今では「どうもありがとうございました」という気持ちである。たかだか数十名のラウンドテーブルを開催するだけでもあれだけの労力が必要だったのだから、ましてや本学会規模の大会を何とか無事終了できたことだけでも大変なことであつたろうと思う。本当にありがとうございました。ちなみに次回、第9回世界畜産学会大会は2003年、ブラジルの Port Alegre で開催されることが決定された。